児童文学

最首悟

児童を対象として見ない視点

サジを投げた状態からの出発

北村　正裕

87.2.

身勝手な理想という投げ方

「神さま、人間はどうして、おとなのまま生れてこないのでしょう？」とは、ブラッドベリの「死の遊び」（『黒いカーニバル』ハヤカワ文庫）に出てくる小学校の先生の慷慨だが、ここに表わされている非痛なこっけいさは、本気になって子どもと格闘して、そして子どもという代物にサジをなげてしまった大人でないともつことができない感覚だ。しかし、すべては、多かれ少なかれこのサジを投げた状態から出発するのである。

このハワード先生のように単純直截に子どもを憎みはじめるかもしれないし、無定形にズルズルとはみ出すアメーバを型に入れようとするような努力を一生懸命続ける人もいるかもしれない。あるいは、純真なかわいい子ども像を勝手につくり上げて、それを愛しむ人も出てくるだろう。しかし、かつては自分だったこの得体のしれない存在に、怖いもの見たさで近づいたり、ちょっかいを出してみるというのが、一番自然な態度だと思われる。口はばったくいえば、児童文学とは、文芸上のこの自然な営みをさすといえるだろう。肝腎なことは、作家が子どもなる存在にサジを投げているということである。だから早熟な児童文学作家というのはなかなか求めがたいのである。もちろん文学は森羅万象にわたってサジを投げたところから始まっていて、児童文学はそのなかに包摂されるのだが、一般にくらべて部分を扱うほうがはるかに厄介なのであり、文学一般の早熟な天才は現われるものの、児童文学ではなかなかそういうことは起らないのだ。

ただ逆の現象として、子どもにサジを投げるどころか、子どもを直接抱きしめ頬ずりをしているような人が児童文学作家を名のるケースが多く、毒にも薬にもならない文学以前の作品をまきちらしているということがある。いや、薬とは元々毒であるということを忘れた作品と言ってよいかも知れぬ。

北村正裕童話集『遺失物係と探偵』（発行者＝北村正裕、芸風書院・一〇〇〇円、一九八六年十二月）に出会った。この童話集の最終に「あとがき（評論）―価値観の粉砕をめざす童話への道（少年少女たちへ）」という、作者自身が児童文学作品とよぶ文章がおさめられている。

この中で、北村はまず自分が、十二歳から十八歳までを対象とした読書サークルを主宰していることを述べ、「僕は、この年代の君たちと共に生きていきたいと思っています」と書く。そしてなぜそういう「身勝手な理想」を掲げるかというと、それこそが自分の児童文学のテーマなのだという。つまり「ともに生きたい」となぜ願うのか少なくとも論理的には言えないので児童文学に向っているのであるというわけで、たいへんに率直である。「身勝手な理想」というサジの投げ方がよろしいように思われる。

北村は〈子どものために〉を排し、〈自分のために〉を押し出す。〈子どものために〉を掲げながら〈大人のための童話〉にしかすぎなかった童心主義を退け、童心主義を批判した教育的発想主義をさらにより激しく拒否する。教育とは「どんなに前衛的なものであっても既成の価値観を権威化して他者に押しつける行為」であるからだ。

ではこの二者と無縁である児童文学とは何か。それは「僕と、子どもたちとが、共通の土俵の上で、全力で〝勝負〟できるような文学空間」である。共通の土俵とはたいへんに危うい設定だが、その内容は「児童性」なり「子ども性」を規定せずに、すなわち「児童」を対象として見ない視点だとされる。と直接説明しているわけではないが、そうとしか読めないようになっている。身勝手さは極まってきたようで、〈子ども〉というのはどういう存在か規定できないのだから、どうやって勝負していいかわからない。第一、相手が勝負をするかどうかわからないのである。

しかし、風車目がけていざ勝負とつっかけていくドンキホーテ性は、教育発想主義よりは、はるかに実りが約束されるのであって、身勝手さは大いに評価されなければいけない。ただし童心主義は身勝手さの範疇に入るのだから、身勝手さの立場からはそんなに批判できるものではないのである。

「いざ勝負」を私は基本的に支うけれど、でも、やっぱり、怖いもの知らずという感じはする。北村正裕は東大数学科出身、二九歳、予備校講師と紹介にある。

微妙なサジの投げ具合

『花の木通りのまじかるさん』（森田瑞枝、大日本図書・九六〇円、一九八六年十二月）は、サジを投げたか投げないか、サジの投げ具合が微妙である。

親のない村上風子が、町に興行にやってきた世界的マジシャンと過した一日。風子は五年生、今はおばちゃんなる人と暮しているが、それまでホームに居て里子体験もしている。〈まじかるさん〉に会いたいと思ったのは、やはりホーム出身と紹介されていたからだ。だが風子があった初老の男は、ほんとうは、マジシャンを志ざして、そのために出産間近かの妻とも別れ、今は〈まじかるさん〉が公演する劇場の下足番だった。

「まじかるさんは子どものとき、自分はいったいだれなんだろうって考えませんでした？」

まじかるさんはおどろきました。こんな小さな子に、なんと返事をすればいいものでしょう。

「そうだねえ、自分は自分で、それ以外に考えようがないと思うけどねえ。」

奥行きがありそうでなさそうで、なさそうでありそうで、ここがサジの投げどころだ。この孤独な大人の言い分は、素直に自分の幸せでない境遇の根本因を語っているのだし、子どもと関わってこなかった幸せを見事に表出もしているのである。そこのところを作者が意識しているのかどうか、この作品が児童文学たりうる瀬戸際に立っている由縁である。（さいしゅ・さとる氏＝東京大学助手・生物学専攻）